

テナガエビ科スジエビの奄美大島における初記録

鈴木廣志¹・大元一樹²・光木愛理¹

¹ 〒 890-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学水産学部

² 〒 894-0056 鹿児島市下荒田 4-50-20 鹿児島大学水産学研究科

はじめに

南西諸島は、鹿児島県種子島から沖縄県与那国島まで連なる、南北約 1200 km わたる島嶼群である。この地域には生物地理境界線の三宅線、渡瀬線、及び蜂須賀線の 3 線が設定され、生物地理学上興味ある地域の 1 つである。そのため陸上の動植物を中心に多くの生物地理学的研究がなされてきた（安間，2001）。陸水産十脚甲殻類に関しても基礎的調査と同時に、その保全を目的とした調査研究がなされ、各種の地理的分布が明らかにされてきた（鹿児島県の自然を記録する会，2002；上田，1963；諸喜田，1975，1979，1989，1991；Shokita & Nishijima，1976，1977；Suzuki et al.，1993）。

その成果の 1 つとして、テナガエビ科スジエビ属のスジエビ *Palaemon paucidens* De Haan, 1844 の分布南限域が鹿児島県種子島及び屋久島であることが明らかにされ、現在に至っている。近年、沖縄島で本種の生息が記録されたが（朝倉，2011；林，2011；諸喜田，1991，2003），本州産のウナギを放流した際に移入した、国内移入種とされている。従って、自然分布における本種の分布南限域は種子島，屋久島と言える。

一方で、奄美大島の陸水域にスジエビが生息することは以前から知られていたが、詳細な調査

及び報告はなされてこなかった。このたび奄美大島の全域調査をする機会に恵まれ、調査した結果、本種の個体群の生息を確認したので、ここに報告する次第である。なお、本調査の一部は平成 26 年度科学研究費補助金（基盤研究（A）課題番号：26241027）により実施された。

材料と方法

調査は、2014 年 8 月 19-21 日に奄美大島全域を網羅するように 34 点で行い、同年 9 月 27-29 日では主に河川上流部の 16 点で行った（図 1）。生物の採集は、タモ網（目合い 3.0 mm）並びに叉網（目合い 5.0 mm）を下流側に設置し、Kick and Sweep 法で行った。採集時には網を入れた回数を記録して、後の採集個体数の平準化に用いた。採集した標本は、70-90% アルコールで固定、保存し実験室に持ち帰った。

結果と考察

今回の調査において、スジエビは 50 調査地点中 4 地点で採集された（図 2）。各地点の相対的生息数は 0.1-0.5 個体/網と少なかったが、嘉徳川及び川内川では比較的多くの生息数（0.5 個体/網）が確認された。嘉徳川では下流の地点（図 3）に集中して生息しているように思われたが、その流呈分布までは明らかにできなかった。また、奄美大島で採集されたスジエビは、その模様（図 4）から俗に言う陸封型と思われたが、残念ながら抱卵個体が採集されず、卵径、卵数からの推定はできなかった。

本種は前述したように、自然分布としての報告は、鹿児島県の種子島，屋久島以北、北海道、

Suzuki, H., K. Oomoto, and A. Mitsuki. 2014. On the new records of palaemonid shrimp, *Palaemon paucidens* De Haan, 1844, in Amami-Oshima Island, Kagoshima Prefecture. *Nature of Kagoshima* 41: 191-193.

☑ SH: Faculty of Fisheries, Kagoshima University, 4-50-20 Shimoarata, Kagoshima 890-0056, Japan (e-mail: suzuki@fish.kagoshima-u.ac.jp).

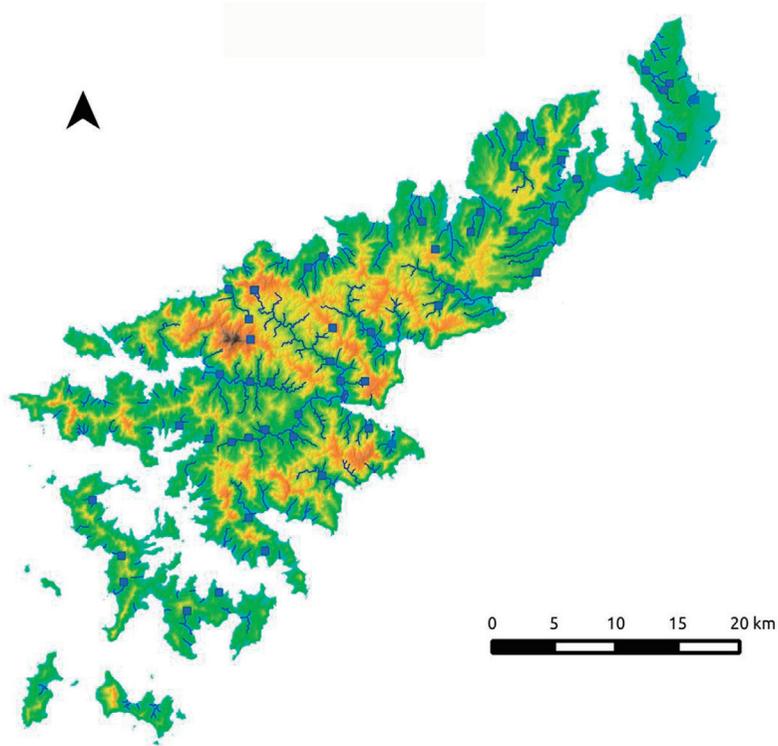


図1. 調査地点（青□）を示す.

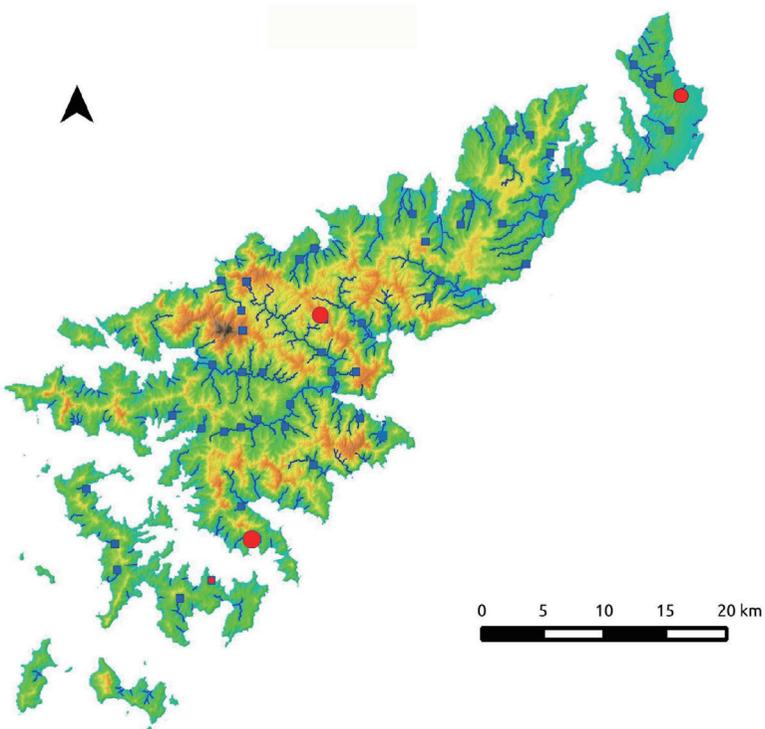


図2. スジエビの奄美大島における分布状況. ○の大きさは1網当たりの採集個体数を半径としたもの.



図3. 奄美大島南部、嘉徳川の下流部の様子。

エトロフ、サハリンまでの東アジアの温帯-寒帯地域である。今回の奄美大島での生息確認は自然分布における南限域を更新することとなった。更に、その生息数が他のテナガエビ類に比べ低く早急な保全対策を講じる必要性も分かった。ただ、今回の調査が8-9月の夏期1回であり、かつ抱卵個体が得られなかったため、奄美大島の個体群が両側回遊型なのか陸封型なのかは断定できなかった。今後は定期的な個体群生態学的調査により、生息数、繁殖様式、新規加入数とその時期、並びに成長などを明らかにし、本個体群の特性を究明し、南限域個体群の保全に資する必要がある。

引用文献

- 朝倉 彰, 2011. 淡水産コエビ下目の生物地理. 川井唯史・中田和義編著, エビ・カニ・ザリガニ 淡水甲殻類の保全と生物学. 生物研究社, 東京, 74-102.
- 林 健一, 2011. 世界の淡水甲殻十脚類. 川井唯史・中田和義編著, エビ・カニ・ザリガニ 淡水甲殻類の保全と生物学. 生物研究社, 東京, 8-38.
- 鹿児島島の自然を記録する会編, 2002. 川の生き物図鑑. 南方新社, 鹿児島市, 386 p.
- 上田常一, 1963. 奄美大島・屋久島・種子島の淡水エビ類, 島根大学論集 (自然科学), 13: 1-28.
- 諸喜田茂充, 1975. 琉球列島の陸水エビ類の分布と種分化について-I. 琉球大学理工学部紀要, 18: 115-136.
- 諸喜田茂充, 1979. 琉球列島の陸水エビ類の分布と種分化について-II. 琉球大学理工学部紀要, 28: 193-278.
- 諸喜田茂充, 1989. 奄美大島産の陸水産エビ類相と分布. 環境庁自然保護局編, 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究. 昭和63年度奄美大島調査報告書: 267-275.



図4. 採集されたスジエビの背面および側面。

- 諸喜田茂充, 1991. 琉球列島の陸産・陸水産甲殻類とその保護. 環境庁自然保護局編, 平成2年度南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な諸条件に関する研究報告書: 394-407.
- 諸喜田茂充, 2003. テナガエビ科 Palaemonidae. 西島信昇監修, 西田睦・鹿谷法一・諸喜田茂充編著, 琉球列島の陸水生物, 255-261.
- Shokita, S. and S. Nishijima, 1976. Faunal list of inland-water malacostraca of Amami group, the Ryukyu Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Island, 2: 31-38.
- Shokita, S. and S. Nishijima, 1977. Land and inland-water crustaceans of Northeastern Ryukyus, the Ryukyu Islands. Ecological Studies of Nature Conservation of the Ryukyu Islands-(III): 185-202.
- Suzuki, H., N. Tanigawa, T. Nagatomo and E. Tsuda, 1993. Distribution of freshwater caridean shrimps and prawns (Atiyidae and Palaemonidae) from Southern Kyushu and adjacent islands, Kagoshima Prefecture, Japan. Crustacean Research, 22: 55-64.
- 安間繁樹, 2001. 琉球列島-生物の多様性と列島のおいたち一. 東海大学出版会, 東京都, 195 p.